

元長野県知事で作家、真つ当さを失う政治と社会への「しなやかな諫言」を本誌に寄稿してきた田中康夫氏が、横浜市長選に出馬表明した。カジノ以外にも現代の諸問題が集中する大都市であり、菅首相のお膝元である横浜の動向は、全国に影響を与えること必至。田中氏は何を構想し、どう実行するのか――。

政治 治の停滞は民意の注
入、つまり選挙によ
って活性化されうる。ここ
にきてようやく、この民主
主義の基本原則が起動し始
めた観がある。
過日の都議選結果では自
民党の一人負け、立憲民主・
共産両党を軸にした野党共
闘奏功が民の声だった。

安倍・菅政治の罪と罰



菅首相のお膝元で多彩な候補が乱立する横浜市長選



「ハマのドン」こと藤木幸夫氏はどう動くのか



倉重篤郎の
ニュース
最前線

田中康夫

独占インタビュー120分

なぜ僕は横浜市長選に挑むのか!

そして今一つ注目すべきは8月8日告示・22日投開票の横浜市長選である。単なる一市長選ではなくなっている。奇しくもオリンピック閉会式の日が告示日、パラリンピック開会式前々日が投票日という巡り合わせだ。菅義偉政権が無理を重ねた無観客・強行開催五輪への都市住民による初の審判という役回りを担わされてもおかしくない。
政局的な意味合いも深い。横浜と言えは菅氏が市議時代から金城湯池を誇ってきた「菅王国」と言っても良い。ところが今回菅氏側近の前閣僚・小此木八郎氏と、前回菅氏が押した現職市長・林文子氏の双方が立つ、という分裂選挙となった。このこと一つとっても王国の亀裂は深刻だが、結果によっては菅氏の権力基盤が選挙区の足元から揺らぐことになりかねない。候補者の多彩さも目を引

く。元閣僚、現職市長以外にも、公衆衛生学を専門とする元大学教授、元特捜検事、元衆議院議員ら現時点で9人が名乗りを上げている。さすがに、カジノ誘致でもめる、予算規模3・9兆円、職員数4・3万人という全国最大級の政令指定都市トップの座である。この選挙への関心が草の根票を掘り起こし、政治のダイナミズムを体現、その民意のうねりが秋の衆院選本番にまで届くことを望みたい。

カジノをやめ統合型レスキュー拠点を

東京生まれで信州育ちのあなたが、なぜ今回は横浜市長選なのか？
「横浜エフエム放送で6年前から音楽番組のパーソナリティーを担当、番組スタッフや出演を通じての知人、横浜在住の大学時代の友人たちと話をする中で、横浜の表のイメージと、実

表しているが、保育園とこの独自の定義を作り、育児休暇を延長、あるいは自宅で求職中の母親の子ども2842人は待機児童ではないという。メートル法の時代に尺貫法を使っている」「調べてみると、問題はいくつもあった。政令市最大の378万人の人口なのに保健所は1カ所だけ。65歳以上の高齢者97万人のうち51万人が一人暮らし。空き家は2割近い18万戸。土砂災害警戒区域に指定されている市街化区域に7万3479戸の家がある。親御さんが教育環境の充実を求めているのになぜカジノ誘致なのか。住みたい街、憧れの街といわれてきたのに、実は住民税も一番高いらしい、とかだ」
「僕は、行政の仕事は、超少子・超高齢社会における、お代を先に頂戴する総合サービス産業だと思ってい

る。サービスとは、人に喜んでもらうってなんぼの仕事。ボランティアと一緒に自分が見たいことを押し付けても相手はその時もういいかもしれない。相手が望んでいるのが何かを常に見極めるのがプロの行政官だ。僕はそういう行政官になりたい」
現市政はそのニーズに答えきれていない？
「皆で議論しているうちに、この街のあり方を変えなければと思えてきた。2000年の長野県知事選の時も、県政の立て直しを望む県民の声なき声に応え、政治経験がなかった僕は出馬した。横浜でも、これいいんでしょとかというところから始まった。市内に家を借り、4月12日の誕生日に、住民票を移した」
何をどう変える？
「横浜は日本で最初に世界に開かれた街だ。政令市で

も最大級だ。大きなポテンシャルと可能性があるので眠っている。それを引き出したい。例えば、同じコンサートホールで、同じ曲目で、同じ楽団員が演奏していても、指揮者が変われば音色も変わる。いわゆる役人仕事で思考が冷温停止状態の職員がいたら、人間の体温に戻してあげる。繰り返すが、同じ楽団で、そこに暮らしている聴衆でも、福祉とか学校授業で全く違う音色を出せる、と僕は信じている。それを長野でもやってきた」
カジノは可能性の外？
「横浜にカジノ・IRは設けないという市民のコンセンサスはすでに取れている。あらゆる調査で常に過半数を大きく上回る方がノーと言っている。市議会でも一度否決された住民投票の再実施は必要ない。そもそも、人口が減少するとか、

日本の閉塞感を変える触媒役に

なぜ僕は横浜市長選に挑むのか！

「城山三郎の『無所属の時間で生きるこの日』の空、この私』というエッセイもある。会社を辞めたら年賀状が来なくなった。残業や宴会もなくなったが、家には居場所もない。無所属の時間だ。その時に初めて自分の居場所を求め、NPOやボランティア、町内会に参加、カントがいうところの『プライベートな時に最もパブリック』な人たちにになる。そういう人たちが、今どこの街にも、もちろん横浜にもいて、カジノがきっかけで、いろんなことに気付き始めた。目の前を見たら、給食もない、保育園児もいっぱい、独居老人もいる、保健所も一つしかない、なのになぜカジノなのか……と」

既成政党受け皿ならず？
「4月の国政3補選、今回の都議選と与党の惨敗・野党の勝利と捉えるのは浅薄だ。今の世の中、政治への絶望は深い。けれどもフランスやイタリアのようにデ

財政赤字だからカジノだというなら全自治体が作らねばならなくなる」

「横浜は関東大震災で2万5千人も亡くなっており、その瓦礫（がれき）を埋めて作ったのが、山下公園だ。隣接する丘の上は文教地区で、歴史のある女学校も数多い。鎮魂の場、教育の場であって、カジノの場所じゃないだろう、というのが、横浜港運協会の藤木幸夫前会長の意見で、この点は僕と期せずして似てる」

藤木氏といえば、「ハマのドン」とも呼ばれる実力者。今回の選挙でも誰にくかが注目されている。小此木家とは先代から深い縁があるが、一方で横浜エフエム放送会長としてあなたとつながりがある。サンデー毎日（2018年9月9日号）でも対談し「カジノは街を減ぼす」で一致、あなたも「イデオロギーを超越した国土と呼ぶる俊

豪だ」と評価している。

「番組を担当する前から大変に親しい。だが、カジノに反対しコロナに打ち克つ（かつ）という藤木氏の主張だけが今回の争点ではない」

カジノではなく何を？
「内陸部に上瀬谷という、在日米軍の通信施設跡地がある。東京ドーム51個分の土地だ。テーマパークにするとの案はすでに破綻しているが、僕は、ここにマンション群を建てるといった従来型発想を取らず、消防・救急・医療・保健の統合型拠点、『インテグレイティッド・レスキュー』を設けることを提案している。お代を先に頂戴した本来のサービス業で市民を護り、救う行政だ」

「先述した高齢独居世帯の多さからすると、保健師や民生委員の方々がどれだけ身を粉にして踏ん張られても、とてもかなわない。保健所も統廃合を重ねた結果

市内に一カ所、市庁舎の中にしかない。このある意味、骨粗鬆症（こつこうしょう）のような惨状の医療、保健体制の抜本的改善を図る。市内を縦断する国道16号、東名高速の横浜町田インターに隣接してい

人は私的な時間に公的な存在になる

12の取り組みを提起。

「中学校へ真つ当な給食を導入、小学校には長野でやったように『地域食材の日』を設ける。待機児童、保留児童という全国1747市町村中唯一の詭弁（ぎべん）を解消する。コロナ対応は早期検査・早期対応の基本に立ち返る。空き家率2割を活用、広葉樹や竹を植えたミニ公園、地域住民菜園化で防火帯の役目も果たす。コンプレックス（手続）を再構築し、横浜スタジアム向かいの旧市庁舎を僅か7700万円で売却する案件も見直す」

る。災害列島の日本、一旦緩急あればお手伝いに出かけることもできる。行政サービスのあり方や意識を変えることだ。幸い横浜には経験豊富なスタッフがい

ンになるようなものではなく、本当に地域の活力となるものだ。提案する議員も、予算提出権を持つ首長も厳しく問われる。そうした市議会議員提案の予算枠を横浜で実現する」

横浜市民の潜在力は？
「哲学者の浅田彰との対談で、彼がエマニュエル・カントの言葉として語っていたことに共感した。カントによると、人間というのは、勤務時間というパブリックな時に最もプライベートな保身という動きをするが、帰宅しプライベートな時に最もパブリックなことを考える、という。政治に対する愚痴や批判に留まらず、今年の夏祭りはどうやるか、子供たちが隣の高校に通うスクールバスの時間を10分早めるべきじゃないか、などとビールを飲みながら語り合う。浅田によると、『非社交的社交性』と言うらしい」

モをするわけでもない。じゃ無関心かといえばそうではない。政治や社会のあり方を問うたり、問うだけではないで、どのように護り、どのように創り直すのか、誰もほとんど示せていないのが現状だ。与野党含めて今の政党組合や団体を向いた政治は消費者という人間に根差していないんじゃないかと皆気付き始めている」

命よりカネが大事という不条理な五輪

それをあなたが示した？
「田中康夫はメディアム（触媒）のような能動的な存在です。僕自身が物書きとして、市民活動家として政治にアンガージュマン（知識人が社会運動に参加すること）、そこに首長としての執行権限が与えられる。その中で僕が発信、実行し、責任を取っていく。ある意味メディアの役割をも兼ねている」

すでにやっていたことが、良い意味でバンドワゴンのようにシンクロして、日本全体の疲弊した制度や閉塞感（へいさく）を変える契機になる。そういう触媒役を果たせたら本望だと思う」

五輪についても聞きたい。
「Tokyoインパール2021」とも呼ばれる今回の五輪は、まさに『おもてなし』で、表がない。裏ばかりってことだ。人の

命よりもカネの力の方が大事だという不条理を日本政府とIOCが全世界に広めた、歴史的なイベントだ。『逆ノーベル平和賞』をあげたいくらいだ」

「五輪には縁がある。長野県知事に当選の2000年は、1998年の冬季長野五輪の宴の後、五輪招致の帳簿は焼いたと居直っていた長野県は財政再建団体転落寸前だった。外部委員で『長野県』調査委員会を作り、県有施設内で見付けた帳簿の一部や資料、関係者から事情を聞き出し、使途不明金や過剰接待、違法な割り当て寄付、不自然な複数口座の利用や入出金管理、虚偽の監査報告などの実態を詳細に調査、県民に報告した。今回も同様な調査が必要となるかもしれない」

田中氏は、安倍・菅政治については多くを語らなかった。ただ、両政権の記録、公文書の管理を軽んじる体